

名古屋大学

NUA  
Nagoya University  
archives

## 大学史資料室ニュース

Nagoya University Archives News 第13号

目次

Contents

Archivesの意義	2
名古屋帝国大学開学記念の「絵はがき」	5
資料室だより	7
資料室日誌抄	10



完成後の名古屋帝國大學 其ノ一

完成後の名古屋帝國大學 其ノ二

# Archives の意義

名古屋大学名誉教授 小川 克郎

LMA(Library, Museum, Archives)のL(図書館)とM(博物館)は誰もがすぐに理解できるが(市民的認知)、A(アーカイブス)は曖昧で、人それぞれのイメージで認識されているようである(市民的不認知)。Archivesは辞書によると「古記録」、「公文書」、「記録保管所」などと日本語には訳されているが、いずれも古ぼけた、極端に言えば幽霊屋敷のような、印象を私達に与える。実際、多くの人がそういうイメージを持っているようである。しかし、英語圏で使われるArchivesはもっと生き生きとしてダイナミックな言葉である。研究の場においてこのことを語ってゆくの

## 1) Archives との出会い

まず、最初に私が初めてArchivesに出会った時のことを語ろう。もう30年も昔のことであるが、私は客員研究員としてカナダのオタワで研究生活を送っていた。私がいたのは地球科学系の国立研究所である。私の研究室は5階であったが、7階には大きな図書館があり、その一角と6階に別れてArchivesの部屋があった。地球科学系ということもあってArchivesの目玉は岩石薄片である。薄片というのは岩石を極く薄く削って顕微鏡でその造岩鉱物を同定する為の重要な試料である。Archivesの部屋には膨大な薄片がカナダの州別



写真1 経済産業省産業技術総合研究所成果普及部門地圏情報棟の岩石 Archives

に分類されて床から天井まで保管されている。その頃使われていたコンピュータのカード程の大きさの長方形の厚紙に薄片は脱着可能な形で差し込まれ、その周りに小さい手書きの字で様々な事柄が書き込まれている。例えば、登録番号、岩石名、採集地名と緯度経度・日時、採集者名、報告書・論文名等である。私が最も驚いたのは、この岩石の現在の保管場所が8階851室、XX大学YY研究室等と詳細に記されていたことである。薄片以外にも地質図、地球化学図、地球物理学図など数多くの多種多様な図類もArchives室に保管されている。私は最初、何故こうした図類が図書館ではなくArchives室にあるかが理解できなかった。そこである日、窓口の女性(この方は地質学の大学修士課程を修めた専門家である)にこの疑問をぶつけてみた。彼女は待ってましたとばかりこのArchivesシステムを説明してくれた。実は、これらの図面類にはある番号が記されているのだが、その番号を頼りに別のArchivesを検索できるようになっていた。そこには、この図の作成に使われた元のデータについての詳しい記述がなされていた。そこにはフィールドノートも含まれていた。フィールドノートは私物という概念を持っていた私にはこれは新鮮な驚きであった。そこには、先程の薄片と同じく元データの現在の所在場所が記されている。3階306室という具合である。



要するにArchives室はデータへのアクセスの窓口の役割を担っていたのである。この窓口では生データまでの全てのルートが分るのである。無論、この時代はまだコンピュータ化は全くされていない。全てがアナログである。それにしてもこのArchivesはよくできていた。最近ではない。30年以上も昔である!

## 2) Archives の役割

では、カナダでは何故このようにArchivesに力を

注いでいたのでしょうか？このことを少し考えて見よう。色々な側面がある。

あ) 学問の継承 科学や技術は日々歳々進歩する。同じ試料も今日は昨日までとは全く違った視点から見る事が出来るかもしれない。その時は報告書や論文に当たっても駄目である。試料に直接当たるのが正解である。実は図書館と Archives を峻別する最大の相違がここに存在している。先程で述べたような図は Archives 室に置かれる必要があるのである。もしこれが時系列的に重要な意味を持つものであれば、失われた試料は取り返しがつかず大きな学問的損失であるし、また空間的な意味しかない場合でもその場所に戻るには相当な労力を要するものである。こうした貴重な生試料の消失を防ぎ確りと守って学問に貢献するのが Archives の大きな役割である。

い) パブリックサービス カナダの国家機関はパブリックサービスを非常に大事な役目と考えている。国費を用いて行われた研究の総てがタックスペイヤーたる全ての国民に帰属するものであるという意識が徹底している。無論、研究の成果物である論文・報告書、図面類だけではなく生データもその対象である。国民は生データに対してもアクセス権を有していると考えられている。翻って、Archives という概念の希薄な我が国ではどうであろうか？かって私の所属していた国立研究所の例をあげて考えてみよう。ここの定年は60歳であるが、その研究者が過去数十年にわたって行ってきた研究は退職後も、当然ながら、論文・報告書、図面類として図書館には残される。しかし、それらの基となった生データやその初期的加工データの殆どがその研究者の退職とともに消え去ってしまう。新しい知見を得た後の時代の研究者が論文などに疑問を抱きその基となったデータにアプローチしたくとも最早手段が無い。これでは国民に対する基本的責務を国家機関が果たしていないと言われても弁解の余地はないであろう。

### 3) Archives 作り

カナダでの経験を持つ私と同じような経験を持つ研究者が Archives の重要性を説き、研究所の筑波移転(昭和54年)を機に新設の博物館と並んで小規模ながら Archives の部屋を確保した。先にも述べたように、Archives の基本は試料検索のシステムである。このシステムを持たない Archives の部屋は只の物置倉庫に過ぎない。そこで、博物館(部レベル)の下に担当部署

(課レベル)を創設してシステム作りを始めた。Archives の最初のステップは登録システムの作成である。何もかも Archives に詰め込んでおは忽ちオーバーフローである。そこで、Archives に登録すべきものの基準を作り、そのフォーマットを定めた。各研究部に専門担当者も置いた。研究者は研究の適当な段階で自分の試料を登録する。登録されたものは指定された場所に収納しなければならない。定年退職者は原則として退職までに総ての試料を登録する義務がある。しかし、このシステムが順調に動いたわけでは決してない。最初の問題は収納場所のオーバーフローである。そこで、基準を変えて登録試料の枠を狭めたりもした。もう一つは研究者の意識の問題である。自分が採ったデータは私物という習慣が抜けきれない。要するに、パブリックサービスという概念は我が国の国家機関では馴染みにくいのである。登録という極めて煩雑な仕事は研究者の意に必ずしもそぐわない。しかしながら、徐々にではあるが登録から入る Archives の理念は浸透していったように思える。恐らく Archives により利益を得た研究者が増えてきたことと、「社会に開かれた国家機関」という概念の浸透がその底流としてあったのだろう。

### 4) Archives とデータベース

Archives をデータベースと比較してみよう。両者とも検索と利用という意味では同じ機能を持っているのは明らかである。違いは行き着く先が「モノ」か「デジタル情報」かである。近代的な Archives では検索機能として最早カードではなくコンピュータ上のデータベースを用いている。最早データベース化されたので「モノ」は捨てても良いのではないかという意見が出ることがある。その意見が原則として正しくない事は既に述べてきた。かって、私達のグループが地熱情報データベースを構築したとき、岩芯(コア)情報のデータベース化とともに Archives をその中に含めることにしたがコア自体は棄てたわけではない。

### 5) 国立大学では？

これまで私の専門とするフィールドワークを主体とした地球科学を例に Archives を語ってきた。しかしながら、恐らく Archives の意義は文系理系を問わずあらゆる専門分野で、多かれ少なかれ、共通しているのではないだろうか？例えば、宇宙物理学の分野においても、過去に観察した星々のデータは時系列的な意味

を持ち、長く保管すべきものときく。恐らく文系でも膨大な調査データの極く一部が報告書や論文に載るに過ぎないであろう。その生データは、とりわけ組織力には欠ける大学では、組織としては保存されないまま

に過ぎて行っているのではないか？

国立大学を取り巻く昨今の潮流の中で、このことは、学問の継承とパブリックサービスの両面で、改めて真剣に考える必要があるのではないだろうか？



図1 岩石試料検索と利用の手順

大学史資料室では小川克郎先生を迎えて「アーカイブズのすすめ」という題で講演を12月21日(土)に行なっていた  
たく予定です。ご関心ある方は最終頁の連絡先までお問い合わせ下さい。

# 名古屋帝国大学開学記念の「絵はがき」

加藤 詔士（鉦治）

## 1. 大学の絵はがき

「ヨーロッパを旅行するとき、町の絵葉書に大学関係のものが多い。……大学のある町では、大学に関わりのある絵葉書の売られていないところが珍しい。」

横尾壮英『大学の誕生と変貌 ヨーロッパ大学史断章』（1999）のなかに、このような指摘がある。日本の場合はどうかというと、町の絵はがきに大学が登場することなど、きわめて珍しい。大きな理由は二つあって、何よりもまず「大学の建物がお粗末で絵にならない」という事情があるであろう。もう一つ、地元の人たちに「おらが大学に対する誇りや愛着といったもの」がみられないということと関わりがあるように思われる。苦しいなかを、血のにじむような努力と涙ぐましい工夫をして、大学設置の夢を実現し育ててきただけに、おらが大学という意識が強いのであろう。「愛着の度合が、日本とヨーロッパでは違う」というのである。

大学の建物や風俗が町の絵はがきにあらわれることは確かに少ないのだけれども、大学自身がみずからの建物を絵はがきにしないなどということはない。とりわけ創立何周年かのさい、記念の品として絵はがきを作って祝賀することは、日本の大学史上しばしばみられる。

たとえば、本学の教育学部の場合、平成11（1999）年に学部創設50周年をむかえたとき、祝賀事業として、基金の創設、写真集の刊行、七宝焼「青磁玉釉花瓶」の贈呈に加えて、記念の絵はがき8枚が作製され、祝賀行事の参加者や募金者にわたられたのである。

他大学の場合、たとえば京都大学が創立百周年を祝ったとき（1997年11月）は、「時計台の四季」と題した絵はがき8枚がやはり用意されている。京大のシンボルである時計台（本部本館）の四季折々、朝夕の風情を撮った写真絵はがきである。このほか、『京大百年』という小冊子、さらには、時計台の80円切手1シート（10枚）を添えて、そのはがき絵が配布されたのだった。ふるさと切手に京都大学の百周年を記念して時計台が選ばれたのにちなみ、日本画家の奥田元宋画伯が描いた時計台のふるさと切手を活用した記念品

を考案したのである。

## 2. 名古屋帝国大学開学記念の絵はがき

本学の起点となった名古屋帝国大学の場合も、実は、開学式のときに絵はがきが作製されている。建物の白黒の写真絵はがきだけでなく、本学の完成予想図の絵を描かせ、それをカラー仕立てにした絵はがきであったことが注目される（表紙写真）。

名古屋帝大が誕生したのは昭和14（1939）年4月1日のことである。医学部と理工学部（のちに工学部と理学部に分離）の二学部から成っていた。当時の修業年限は3年であって、昭和17年に第1回卒業生（工学部）を送りだすと、翌年の5月1日に開学式がひられた。式典は、東山地区キャンパス内の山手通わき、今の豊田講堂前の芝生あたりでおこなわれた。ここに来賓650名、教職員200名が集って盛大に開かれた。

このとき、開学祝の記念品として、絵はがきが用意されたのである。5枚一組の絵はがきが祝典のさいに贈られたのだが、奥ゆかしい気のきいた工夫がなされていた。袋入りではなくて、「名古屋帝国大学開学記念」と表書きされた用紙に包みこまれて、配られたのである。しかも、単なる包み紙ではない。包み紙の裏面には「名古屋帝国大学要覧」が印刷されていたのだから、感心させられる。「名古屋帝国大学開学記念」と表書きされた包み紙は、縦32センチ、横は29.5センチの大きさで、やや黄身がかった色合いである。その裏面に、学部や本部の所在・配置、それに始業の場所と時期、新敷地の形状、交通の便についての説明があり、これに「敷地並建物配置図」が付されて案内されているのである。心にくい工夫である。

その要覧のなか、新敷地について、ここがいかにか文教の場にふさわしいか謳われている。「名古屋東山公園二連接セル丘陵地帯二在リ……四圍閑静、眼界豁達、土地高燥ニシテ空気清浄ノ地ナリ」というのである。

開学祝の記念品は絵はがきだけではなく、ほかに二



点あった。一つは『名古屋帝国大学創立概要』というパンフレットであって、A5判で102頁。名古屋帝大誕生までの経緯と事情、現行の関係法規と規則、構成員や施設の現況、それに本学の沿革が記されている。もう一つは、肉池、すなわち印肉をいれる容器であった。鯨がデザインされており、蓋の裏面には「名古屋帝国大学開学記念」と刻印されている。鯨のデザインされた文鎮をという提案もあったが、「肉池ヲ適当トスル意見」のほうが多かった。

### 3. 絵はがき「完成後ノ名古屋帝国大学」

開学祝の記念の品として配られた絵はがきは5枚あって、それぞれつぎのようなキャプションがついている。最初の2枚がカラー写真、残りの3枚は白黒写真である。

「完成後ノ名古屋帝国大学 其ノ一」

「完成後ノ名古屋帝国大学 其ノ二」

「医学部本館 医学部附属医院本館」

「工学部実験室ノ一部、工学部教室及実験室ノ一部」

「理学部玄関 理学部教室及実験室ノ一部」

医学部は、鶴舞キャンパスにあった既存の名古屋医科大学を組織がえしただけに、その本館の建物写真は堂々たる白亜の二階建・三階建である。しかも、植え込みの木々は伸びやかに育ち、いかにも学びの殿堂を思わせる風情である。

これに対して、東山の新キャンパスに造営された工学部と理学部の建物群は、木造で平屋もしくは二階建。まるで閉鎖された工場か倉庫、あるいは収容所かと思わせる。植樹もまだ進んでおらず、一二の木々がみえても葉はつけていない。いかにも寒々しい。本学が、戦時下の、実にきびしい社会状況のなかで船出したことを、象徴するような光景である。

「完成後ノ名古屋帝国大学」の絵はがきの方は、3・4階建の鉄筋校舎が描かれ、4棟からなる高層の本部棟もしっかり配されている。木々も豊かに茂っている。一枚目は鏡ヶ池から本部の方をながめた図柄であって、グリーンを基調にしたおだやかな色合いである。桜なのか花水木なのか、鏡ヶ池端や山手通わきなどには桃色の花をつけた木々が描かれて、あたたかさを感じられる。これが春の景色であるのに対して、もう一枚の方は、色合いからして秋のキャンパス風景であろう。茶色の色調がめだっている。本部棟の東の高台から西方の市街地をながめた図柄であって、本部奥の木々や山手通西側の木々はあかく色づいている。山手通には

車も行きかっており、あかるさ、勢いが感じられる。

この「完成後ノ名古屋帝国大学」という二枚の絵はがきは、昭和18(1943)年という時期に配布されただけに注目される。いわゆる戦時体制下であるのに、カラー刷りで製作されているのである。待望久しかった帝国大学がいよいよ誕生し、体制をととのえてこれから大きく育っていこうという、力強い意気込みが感じられてくるようである。

この二枚の絵はがきは京都高等工芸学校(京都工芸繊維大学の前身)の向井寛三郎教授に原図の作製が依頼されたが、その絵はどこまでも理想的な構想図ではなかった、ということも注目される。中央街路の形状や建物の配置からすると、当時(昭和17年1月27日)策定された「名古屋帝国大学計画案」に基本的にもとづいている。ただし、本部建物については、渋澤元治総長の意向で、「日本的二加味修正」されることになり、瓦屋根を載せた意匠の建物として描かれた。名古屋帝国大学の将来構想に、渋澤総長がなみなみならぬ期待と関心をよせていたことが、ここからも裏づけられる。



## 資料室だより

### 『名古屋大学大学史資料室保存資料目録第2集』と 『名大史ブックレット第4・5巻』を刊行しました

大学史資料室では、今年3月末までに『名古屋大学大学史資料室保存資料目録2』と『名大史ブックレット』の第4・5巻の計3冊を刊行しました。

目録は大学史資料室が保存している資料のうち、学生自治会・職員組合・生協・名大出版会・名古屋大学史全般に関するものとその他の分野を合わせて、「名古屋大学関係分2」として収録しました。この目録が本学内外の様々な業務・調査・教育・研究などに、広く役立つことを望んでおります。今後は他大学史関係、高等教育(史)に関わる資料をさらに刊行していくつもりです。

名大史ブックレットは、第4巻が『豊田講堂と古川図書館』、第5巻が『名古屋大学最初の外国人教師』という内容です。いずれも新入大学院生・新入学部生をはじめ、一般の学生・院生・教職員の方も対象として、名古屋大学の歴史を簡単にわかりやすく解説したもので、手軽に読めるものです。

なお、上記刊行物をご入用の方がございましたら、大学史資料室までご連絡下さい。また目録第1集・名大史ブックレット第1～3巻も配布しておりますので、こちらもお入用の方のご連絡をお待ちしております(本体無料、連絡先は巻末、なお目録については第1・2集とも残部僅少です)

大学史資料室では、名古屋大学に関係する資料を、学内外にかかわらず広く収集しております。本目録に収録されていない資料で、その所在をご存じの方がございましたら、これもまた大学史資料室までご一報ください。



## 名古屋大学博物館第4回特別展示 「名帝大けふ誕生 初代総長澁澤元治とその時代」を無事終了しました

前号ニュースでお知らせしましたように、4月8日から名古屋大学博物館と共催で行ってきました第4回特別展示「名帝大けふ誕生 初代総長澁澤元治とその時代」は8月31日をもって無事終了することができました。入場者数は約4000名に登り、多くのご来館をいただき誠にありがとうございました。また、この間に資料提供など申し出ていただいたり、ご助言をいただくなど、今回の展示にご協力を下さりました方々にも改めて御礼申し上げます。

なお、展示の内容・結果については、博物館の『博物館報告第3集』で報告されるとともに、当室の『名大史ブックレット第6巻』として刊行する予定をしております。今暫くお待ち下さい。



## 名古屋大学国際フォーラム特別展示 『名古屋大学の軌跡 国際社会と知的交流』を開催しました

6月23・24日に本学が開催した第1回国際フォーラム『名古屋大学国際フォーラム - 新世紀を築く大学の英知 - 』にあわせて、サテライト企画が各部局で行われましたが、当室もその一環として、上記特別展示を6月21～25日にかけて、フォーラムが行なわれた本学豊田講堂ロビーで開催しました。

この展示は、このフォーラムに参加いただいた方々に、本学における過去と現在の国際交流活動の一端を知っていただけるよう企画したものです。展示の概要はつぎの通りです。

### ごあいさつ

名古屋大学における国際交流の現状

本学の沿革

名古屋大学における国際交流活動の沿革

名古屋大学の国際交流マップ

### 憲章

開校当初のお雇い教師

戦前の外国人教師

専任の「外国人教員」および外国人助手

郁達夫と第八高等学校

汪兆銘と名古屋帝国大学医学部

戦前名古屋の留学生宿舎

戦後名古屋大学の留学生

愛知留学生会と名古屋大学

5日間、多くの方にご閲覧いただき誠にありがとうございました。また、資料提供など今回の展示にご協力いただいた方々にも改めて御礼申し上げます。

なお、展示の詳細については、後日当室のホームページで閲覧できるよう現在準備をいたしております。今暫くお待ち下さい。



# 資料室日誌(抄)

- 2月12日 永井義雄名大名誉教授、資料寄贈のため来室。  
2月13日 市川茂雄氏より、渋澤元治関係資料受贈。  
2月18日 東京工業大学教員江上生子氏より、江上不二夫氏関係資料受贈。  
2月20日 加藤室長、神谷・山口室員、大学アーカイヴズに関する研究会参加、21日まで。  
3月4日 金沢大学50年史編纂室員、大学史資料室見学のため来室。  
3月5日 東京工業大学助手江上生子氏、資料室見学および資料寄贈のため来室。  
3月7日 山崎一雄名大名誉教授より資料受贈。  
3月8日 名大総務部長、大学史資料室見学のため来室。  
山崎一雄名大名誉教授より資料受贈。  
3月12日 加藤貞夫氏より、岡崎高等師範学校関係資料受贈。  
大学史資料室運営委員会(第6回)開催。  
金沢大学学生寮生3名、名大学生寮移転状況調査および資料室見学のため来室。  
3月13日 山口室員、東京都出張(国会図書館、国立教育政策研究所、15日まで)。  
3月19日 大学史資料室協議委員会(第6回)開催。  
3月22日 山口室員、京都市出張(京都大学大学文書館、京都府立総合資料館、23日まで)。  
3月25日 『名古屋大学大学史資料室ニュース』第12号刊行。  
3月28日 神谷室員、東京都・さいたま市出張(第30回全国大学史資料協議会参加、埼玉県立博物館「特別展 めざせ日本の近代化～日本の産業育てた渋沢栄一～」見学と渋沢元治資料の調査、29日まで)。  
3月29日 『名大史ブックレット5 名古屋大学最初の外国人教師 - ヨングハンス先生とローレツ先生』刊行。  
3月31日 『名古屋大学史紀要』第10号刊行。『名古屋大学大学史資料室 保存資料目録第2集(名古屋大学関係分2)』刊行。  
4月5日 大学史資料室将来構想専門委員会(第5回)開催。  
4月8日 名大博物館特別展(大学史資料室共催)『名帝大けい誕生 - 初代総長 渋澤元治とその時代 -』開催、8月31日まで。  
4月9日 服部治朗氏より八高学生寮宿帳を借用。  
4月15日 全学共通科目(基本主題科目)「日本の社会と歴史」授業開始(前期)。三上垣氏・井上俊名大名誉教授より、学生寮「衆善寮」関係資料借用。  
4月18日 加藤室長、名大博物館特別展(大学史資料室共催)

- にて『名古屋帝国大学誕生のころ』講演。  
4月24日 将来構想ワーキンググループ会議(第1回)開催。  
4月26日 小方芳郎名大名誉教授より資料受贈。  
5月8日 将来構想ワーキンググループ会議(第2回)開催。  
5月9日 名大大学院教育発達科学研究科教員より資料受贈。  
5月10日 名大工学部教員木方十根氏、名大博物館特別展(大学史資料室共催)にて『名古屋帝国大学創設期のキャンパスプラン』講演。  
名大大学院文学研究科教員より、資料受贈。  
5月15日 トヨタ自動車社員武井良文氏、名大講座の歴史について調査のため来室。  
将来構想ワーキンググループ会議(第3回)開催。  
5月16日 名大農学部事務員、資料寄贈のため来室。  
5月20日 名大幸地区事務員、資料寄贈のため来室。  
5月21日 大学史資料室運営委員会(第7回)開催。  
名大大学院理学研究科教員、資料寄贈のため来室。  
5月22日 将来構想ワーキンググループ会議(第4回)開催。  
5月23日 組織改革検討委員会第7小委員会出席。  
5月29日 将来構想ワーキンググループ会議(第5回)開催。  
5月31日 『名大トピックス』に『ちょっと名大史』連載開始。  
6月4日 将来構想ワーキンググループ会議(第6回)開催。  
6月5日 名大生協事務員、『卒業アルバム2002』データ更新につき来室。  
6月7日 丸勢進名大名誉教授、名大博物館特別展(大学史資料室共催)にて『電子顕微鏡HU-2型をめぐって』講演。  
6月11日 大学史資料室運営委員会(第8回)開催。  
共同教育研究施設運営委員会(第8回)出席。  
6月21日 東京農工大学教員高橋雄造氏、榊米一郎名大名誉教授、宮地巖名大名誉教授、名大博物館特別展(大学史資料室共催)にて『渋澤元治の足跡』講演。  
名古屋大学国際フォーラム特別展示『名古屋大学の軌跡』開催(6月25日まで)。  
6月26日 日経新聞記者、取材のため来室。  
7月3日 名大幸地区事務員、資料寄贈のため来室。  
7月4日 瓜谷郁三名大名誉教授、資料寄贈の方法の照会のため来室。  
7月11日 名大医学部教員より資料受贈。  
名大施設計画推進室員より資料受贈。  
7月22日 資料収集専門委員会(第4回)開催。  
国立国語研究所員、研究機関における資料保存について調査のおよび資料室見学のため来室。

## 名古屋大学大学史資料室ニュース 第13号 Nagoya University Archives News No. 13

名古屋大学大学史資料室

室長 加藤 鉦治(教授・併任)  
専任室員 神谷 智(助手)  
山口 拓史(助手)  
事務員 増田 よしみ

発行日 2002年11月30日(年2回刊)

編集発行 名古屋大学大学史資料室  
名古屋市中区千種区不老町 〒464-8601  
電話(052)789-2046  
E-mail: nua\_office@cc.nagoya-u.ac.jp

印刷 株式会社荒川印刷  
名古屋市中区千代田2-16-38